2016年度

インターンシップ・プログラム

プログレスコース

プロジェクト報告書

京都府教育委員会

演習を通しての学び

大谷大学　井上　恵介　　京都女子大学　大野　千菜美
龍谷大学　永井　友浩　　京都女子大学　糀谷　浩美
龍谷大学　藤田　賀奈子

1　演習校　　宇治市立菟道小学校
2　演習内容
(1) 登校指導
(2) 授業見学・学習指導
(3) 給食指導・掃除指導
(4) 学校行事
3　演習を終えて

今まで私たちが思い描いていた教師の仕事は漠然としたものでしたが、実際に学校現場に入ることにより、教育における様々な配慮や工夫など、教師の仕事について広く学ぶことができました。

教師の１日は登校指導から始まり、児童と笑顔で挨拶を行います。登校指導では、礼儀やマナーについての教育はもちろんのこと、児童の体調等を観察したり、明るい雰囲気を作ったりすることを目的としているということを学びました。私たちも実際に登校指導に参加し、登校してくる児童と顔を合わせることにより、その日の児童との関わりがスムーズに始まるということに気が付くことができました。

授業に関しては、先生方が行う授業を実際に見学させていただき、将来教師になった時に活かせる技術や工夫を多く学ぶことができました。例えば、1 年生の授業においては、クラス全員が理解できるよう、発問や指示をわかりやすく丁寧に伝えるといった工夫がされており、中学年になると児童自身の気づきを大切にし、指示を細かく出さずとも主体的に行動できるような声かけをするなど、学年によって指導や声かけの方法に工夫の違いが見られました。また授業見学だけでなく、机間指導や児童の前で本の読み聞かせを行うなど実際に授業に参加することができました。

授業時間以外の給食時間や掃除時間においても、指導するという教師の立場に立って活動することにより、近い距離で先生方の仕事や児童の様子を知ることができました。給食時間は児童と様々な会話をすることよって児童との関係を深めることができ、児童理解をするための大切な時間であるということを学びました。

行事に関しては、10 月に運動会や遠足に参加させていただきました。運動会では、演技や競技の指導補助にあたり、本番当日には児童と一緒に準備や係活動を行うなど、先生方と共に運動会を運営していくという貴重な体験をさせていただきました。

こうした活動を通して、私たちは自身の課題を発見し、教師の魅力を再確認することができました。さらに実際に現場に立ち、児童の成長を見守り、教師の仕事を学ぶことができました。今回、演習を通して学んだことは、各々の大学での学びや教育実習などに活かしていけるものばかりでした。教師になりたいという熱い想いを持ち続け、今後とも精進していきたいと強く思うようになった貴重な機会となりました。

京都府教育委員会 教員養成サポートセミナー

京都産業大学　下條真太郎　　龍谷大学　中川優磨
京都橘大学　藪下　純

1　演習校　　宇治市立東宇治中学校

2　演習内容

(1) 授業における見学・補助：多くの教師の授業に実際に参加させていただき、その授業方法や展開について学び、時にはその授業において実際に生徒と交流したり、指導を行った。

(2) 学校行事(体育大会・文化祭)における参加・補助：体育大会や文化祭において、本番までの準備を生徒側（練習、役割決め、準備・後片付け 等）と教師側（指導、生徒補助、本番時の役割ごとの仕事、準備・後片付け 等）の両方で行った。実際に体育大会では、本番にも参加させていただき、教師や保護者と共に仕事に従事した。

(3) 部活動における参加・補助：各実習生において、それぞれ異なる部活動で、その部活動の顧問の教師の補助をさせていただき、実際に生徒と練習を行ったり指導を行った。

(4) 授業外における教師の仕事の見学・補助：授業以外の時間における教師の仕事を見学させていただき、時にはその補助をさせていただいた。(ex.理科における予備実験、授業で使用するワークシート作成　等)

3　演習を終えて

(1) 私は教員と生徒の関わりを現場で観察し、教師の役割を明らかにすることを目指した。結論から、教員の学級における役割は生徒の「居心地の良さ」を確立することである。生徒は秩序を望んでおり、騒々しい生徒に不快を感じている生徒が見受けられた。教員の役割は、この生徒の感じる「不快」を取り除くために適切に注意することであり、また注意することで注意される対象とそれを見つめる周囲全体を「生徒指導」することにもある。教師は学級に秩序をもたらし、学級に居心地の良さを作り出さねばならないことを学んだ。（下條真太郎）

(2) 私は、今回「学習意欲を向上させるための教師の働き＝学校づくり」というテーマで演習に取り組んだ。その理由として、教師が生徒に与える影響でもっとも大きいのは「授業」だと考えているためである。演習を通して、教師それぞれが個性のある授業を展開されていたが、その裏には教科間、又は学年間の教師等で情報共有や意見交換することで、より良い学校づくりを目指されていた。それぞれの役割がある学校という場で互いが助け合うというのは、生徒にとってのより良い学校づくりのためには本当に大切なことであり、必要なことだと学んだ。（中川優磨）

(3) 演習を終えて私は、教師同士のサポート体制が大切ということを学んだ。例を挙げると、何か問題が起こった時に対応するために教室を空けてしまう教師を確認し、そこに入るのは誰かを明確にしてクラスが生徒だけになることが無いようにされている。授業の空き時間も廊下を回り、学年の他のクラスの授業を見学していた。見学することによって生徒の様子を前からではなく後ろからも見ることができトラブルが起きたら一人ではなく二人で問題にあたることができる。このようなサポート体制が学校を運営していくうえで必要であることがわかった。（藪下純）

向陽小学校での演習を通して

大谷大学　東　花純　　大谷大学　高本　悦子
京都女子大学　内藤　早紀　　京都産業大学　福原　杏理
京都女子大学　藤田　綾乃　　大阪経済大学　八木　武志
平安女学院大学　山本　真由香

1　演習校　　向陽市立向陽小学校

2　演習内容

(1) 各学年に配属された担当の学級にて、教師の仕事を体験した。

ア　児童が取り組んだ課題の丸つけを行った。丸つけをする中で学んだことは、正確にすることとスピーディーにすることであるが、この 2 つどちらも追求することは難しいと痛感した。

イ　授業の学習補助を行った。同じ学習内容であっても、児童の理解度や課題は一人ひとり異なる。それぞれの児童に適した声掛けや指導を工夫することで、児童への支援の方法が分かった。

ウ　児童を連れて教室移動することを実習生だけで行うときがあった。歩幅や歩く速度、さらには目的教室までのルートにも配慮する必要があることに気づいた。これは実際に経験したからこそ気付けたことだろう。

エ　給食の時間も大切な学習時間であった。たとえ食べ物の好き嫌いがあるとしても、残さず食べるということは、今後、社会に出る上では必要なことである。そこで、少しでも苦手なものも食べられるようにと、声掛けや支援を行った。

(2) 教壇に立つことだけが教師の仕事ではなく、それ以外にも児童がよりよく学校生活を送るためには不可欠な仕事もあった。

ア　配布物の準備を行った。この作業は予想以上に時間と労力のかかる仕事であった。それも学級単位のプリントならまだしも、学年単位になるとなおさらであった。効率性と丁寧さが求められる大事な仕事であった。

イ　児童に図書をすすめる掲示物を作成した。限られた時間の中で、その図書のおもしろさを児童により分かりやすく伝える為に、言葉選びやデザインを工夫した。

ウ　図書室の蔵書整理を行った。期日までに返却されているかの確認作業は大切だが、膨大な時間を要する大変な作業であった。

エ　花壇の植物の管理を行った。卒業式にも使用できるようにと、児童が植えた苗に、水やりなどの手入れを行った。

3　演習を終えて

6 ヶ月間、実習をさせていただきありがとうございました。現場での経験は、私達実習生にとって多くの気づきとなり、教師になりたいという気持ちをより一層強くさせました。今回の実習で学んだことを活かし、夢に向かって取り組んでいきたいと思います。

学校の「つながり」と私たちの「カラー」

京都華頂大学　饗庭美佳
京都産業大学　篠田賢弥
龍谷大学　　津田元也

1　演習校　　城陽市立西城陽中学校
2　演習内容
(1) 学校づくりと学級づくり
ア　朝学活、終学活、道徳教育、給食、掃除時間、休み時間の補助、参加
(2) 授業見学と部活動参加
ア　担当教科及び担当クラス、特別支援学級の授業見学、補助
イ　部活動における生徒への指導、助言
(3) 体育大会の準備・運営
ア　競技で使用する小道具の製作、練習参加、前日準備、当日の運営、後片付け
3　演習を終えて

私たちは、演習前に「理想の教師」について意見を共有し演習を始めた。演習当初には、生徒と教師の「つながり」のみの視点で演習を進めていたが、生徒と生徒・生徒と教師・教師と教師というそれぞれの「つながり」の大切さを感じた。

その転機となったのが「体育大会」である。ブロック、種目、クラス毎に代表を決め、生徒一人ひとりが自ら考え、同じ目標を持った生徒同士の「つながり」があった。また、体育大会では各ブロックの代表生徒による会議が行われ、通常の学校生活でも班長会議や生徒会活動を行い、生徒が自発的に活動し学校をひとつにしている。そして、その「つながり」は通常の学校生活にも活かされている。教室の座席はコの字型、常にお互いの顔が見える。男女が均等に配分された各班で協力し生活を共にする。そこからも生徒同士の「つながり」が育まれていた。そして教師は学級や各代表会議で、生徒の個性を活かし一人ひとりが輝けるような助言や声掛けを行い、生徒と教師の間には信頼関係が築かれていた。そして、それぞれの教師が自身の役割や立場を意識し、その場に応じた教師が生徒指導、悩み相談、進路相談などを行う。さらに、教師同士の助け合いや協力、相談、生徒の情報共有といった教師同士の「つながり」が重要であることも感じた。このように学校生活では、生徒と生徒・生徒と教師・教師と教師の「つながり」が隠されていたこと、そしてその重要性を肌で感じることができた。

そこで、その「つながり」を形成するためにはまず、自己理解が必要であると考える。私たちの「特徴や個性は何か」という、私たち自身の「カラー」を知ることにより、どんな雰囲気の学級をつくり、生徒とどう接し、どんな教師になりたいのかが明確になる。そして演習終盤には、生徒による通知表形式の私たちの評価を基にその理解を深めることが出来た。生徒に評価してもらった通知表は、私たちの目指す教師像と現実とのギャップを知り、今の自分を見つめ直すことができた。今回の演習を通し教師の役割を再認識し、教師の魅力に触れることが出来た。そして、西城陽中学校の生徒と先生方と触れ合うことで「教師になりたい」という夢を改めて強く感じた。